

『私より強くなったら、貴方に嫁いてもいいですよ』と。そんなことを言ったことがある。四百年の間で何度か。相手は契約者だったり、その周囲の人間だったり様々だ。

嘘をついたわけではない。ただ分かっていただけだ。

最強の魔女である自分をくだせる人間などいないと。

だから自分はずっと一人でいることが当然なのだ。

そう、思っていた。

一步を大きく踏みこむ。

足裏で砂を擦る音が聞こえ、だがそれよりも自分の鋭く吐く息の方が重く響いた。ティナーシャは細身の長剣を振るう。同時に無詠唱で風の刃を生んだ。

設定は全方位。それは半ば身に沁みついた過程だ。四百年の間、戦い続けてきた彼女の得た技術だ。またたきする間もなく、逃げ場のない攻撃が相手を襲う。

——だが、その攻撃は何一つ彼に届くことはなかった。

彼の剣の一閃が、二人の間に生まれた風の刃を切り払う。

その刃はまた、彼女自身の剣をも小枝のように弾き上げる。金属同士がぶつかりあう高い音が響き、ティナーシャの眼前はがら空きになった。

「っ……！」

反射的に後ろに下がろうとした時には、既に遅い。

彼女の華奢な体は男の小脇に抱えられ、強制的に後ろに跳んでいた。その勢いのまま彼は反転すると、追尾してくる風の刃を斬りおとす。ほんの一瞬の間にくるくると回転させられ、ティナーシャは彼の手から解放されるとよろめいた。その背を男の手が支える。

「大丈夫か、ティナーシャ」

「め、目が回る……」

額を押さえる彼女に苦笑したのは、この国の王である青年だ。大陸屈指の剣士でもある彼はティナーシャの契約者で——今は夫でもある。

ティナーシャはようやくふらつきから覚めると彼を見上げた。

「魔法ありでも貴方がアカーシアを使っていると本当勝てませんね。次からは遠距離戦にしません？」

「それで俺にどうやって戦えと」

「だって全然勝てないんですもん」

頬を膨らますティナーシャは手に持っていた長剣を消す。よく晴れた日の午後、二人がいるのは、城の訓練場だ。

先ほどから王と妃が手合わせしているのを、兵士たちが興味ありげに見ている。彼らが遠巻きにしているのは、魔法の巻き添えを恐れていることだろう。

ティナーシャは肩で息をつく。

「貴方と手合わせしていると、ルクレツィアが『鍛えといて野に放つな』と言う気持ちも分かる気がします」

「あいつそんなこと言ってたのか」

確かにオスカーに対魔法士戦を叩きこんだのはティナーシャだが、ここまでになるのはさすがに予想外だった。オスカーは小柄な妻の頭をぐりぐりと撫でる。

「今までの契約者でお前に勝てそうなやつはいなかったのか？」

「剣技で上回っている人はいましたよ。ただ魔法も絡めるとさすがにいませんでした。それでも懲りずに挑戦してきた人は何人かいましたけどね」

「挑戦って魔女討伐か何かか？」

「求婚がうるさかったので。私に勝てたら結婚してもいい

って言ったんですよ」

それを聞いたオスカーは青い目を丸くする。珍しい彼の表情にティナーシャはくすりと笑った。

「でも毎回返り討ちにしました。二百年くらい前の話ですけどね」

「お前……なんで俺にはその条件を出してこなかったんだ」

「相手の力量を見て出しているからです。貴方にそんな条件つけたら、すぐ結婚させられちゃうに決まってるじゃないですか。やですよ」

「今、結婚してるよな？」

「してまずけど」

それとこれとは話が別だ。彼を愛して妻になると、彼に負けて悔しさを噛みしめて嫁ぐのとは色々違う、気がする。それに、今は充分幸せなのだ。幸せで、でも彼に負ける度に一抹の釈然としなさを感じる。

ティナーシャはふわりと浮かび上がると、オスカーの首に抱き着いた。

「私ももうちょっと強くなりたいです」

「気持ちは分かるがそれ人前で言うなよ。皆が慄く」

「貴方、私より強いじゃないですか……」

だから、何があっても平気だ、と思う。たとえ自分が狂ってしまった時には、彼が自分を殺してくれるだろう。もう自分は一人ではない。彼と共に歩いていくことを選んだのだ。ティナーシャはふっと顔を綻ばせると、ついでに夫に口づける。

「私より一生強く在ってくださいね」

「努力するさ。お前に飽きられないようにな」

王の言葉に、魔女は声を上げて笑う。

当たり前の平穏な日の終わりは、すぐそこに迫っていた。